

令和5年度 自己評価・学校関係者評価 報告書

岐阜県立大垣南高等学校 学校番号 22

I 自己評価

1 学校教育目標	建学の精神「堅実真摯」 ～こつこつと ひたむきに～ 生徒一人ひとりの知・徳・体の調和のとれた人格形成を目指し、豊かな人間性と健全な心身を育み、自らの可能性を追求し地域社会に貢献できる生徒を育成する。		
2 スクール・ポリシー	『育てたい生徒像』 グラデュエーション・ポリシー (GP) <ul style="list-style-type: none"> ・ 確かな学力を身に付け、よりよく課題を解決する思考力・判断力・行動力をもち、自立して主体的に行動することができる生徒 ・ 豊かな情操と規範意識をもち、自己効力感が高く、他者を思いやり地域や社会に積極的に貢献しようとする心に富んだ生徒 ・ 健康維持や体力づくりに努め、自他の生命を尊重し、たくましく生きる力を身に付けた生徒 	『生徒をどう育てるか』 カリキュラム・ポリシー (CP) <ul style="list-style-type: none"> ・ 課題発見力・課題解決力を育成するための「主体的・対話的で深い学び」や「探究的な学び」の推進と、ICT等を活用したコミュニケーション能力と発信力の養成 ・ 生徒一人ひとりの個性や長所を伸ばし自己効力感を高めるためのカリキュラムの編成と、個に応じた細やかな指導の実施による自己効力感の伸長 ・ 勉強と部活動を両立させ心身ともに健康で人を思いやる豊かな人間性の涵養 	『どんな生徒を待っているか』 アドミッション・ポリシー (AP) <ul style="list-style-type: none"> ・ 大学進学を目指し、多様な学びに主体的に取り組み、自らの可能性に挑戦したいという意欲のある生徒 ・ 向上心をもち、部活動や生徒会活動に積極的に参加し、他者と協働してよりよい学校や社会を築いていこうという意欲のある生徒

3 評価する領域・分野	◇学習指導	
4 現状の分析 (生徒及び保護者等を対象とするアンケートの結果分析等)	アンケート回収の形式の変更により単純な経年比較が困難なため、否定的な回答に注目して、各項目における否定的な意見の割合を他項目と比較しながら分析をした。 <ul style="list-style-type: none"> ・ 全体的に生徒、保護者共に「分からない」という回答が大きく増加した。回答対象者を全生徒・保護者にしたことと、紙からデジタル上での回答に変更したことで、「分からない」と回答しやすくなったことも原因と考えられる。 ・ 生徒の回答については全体的には否定的な意見の割合が増加しているが、「総合的な探究の時間の内容は自分にとって有意義である」については否定的な意見の割合は減少した。 ・ 保護者を対象としたアンケート結果からは「教職員の熱意」、「生徒の学力向上に向けた教員の指導」の点について否定的な意見の割合が減少した。 	
5 学校の抱える課題	<ul style="list-style-type: none"> ・ アンケートの項目ではないが、家庭学習の習慣が付いておらず、家庭での学習時間の確保ができない生徒が少なからずいる。ほぼ全員の生徒が進学を希望しているが、授業だけでは進学希望を実現する学力をつけることは難しいため、1年次からの家庭学習への指導・支援を通じた学習習慣の確立が本校の「学習指導」における課題であると考えます。 	
6 今年度の具体的かつ明確な重点目標	<ul style="list-style-type: none"> ・ 教員による授業や家庭学習への丁寧な指導、支援を実践していく。特に家庭学習については、経過を丁寧にチェックし、随所で支援を行い、生徒が「見てもらえている、寄り添ってもらえている」という感覚を持てるような指導を行っていく。 	
7 目標の達成に必要な具体的な取組	8 達成度の判断・判定基準あるいは指標	
(1) 課題の丁寧なチェックやこまめなフィードバックを行い、家庭での学習を学校から支援する。 (2) ICTを活用した学習支援のさらなる浸透を図る。	(1) 生徒の課題への取組の変化 (2) 授業に対する姿勢、満足度および学力の向上	

9 取組状況・実践内容等	10 評価視点	11 評 価
<ul style="list-style-type: none"> 夏と冬に補充を行い、学習面で課題を抱えている生徒の支援を実施 年1回の研究授業・研究会と年2回の公開授業週間の実施 年2回の生徒による授業アンケートの実施 授業での一人一台タブレットの活用推進 	①職員の取り組み状況 ②生徒の課題への取り組みの変化 ③授業に対する姿勢、満足度	A (B) C D A (B) C D A (B) C D
12 成 果 課 題	<ul style="list-style-type: none"> ○昨年度までは夏のみ行っていた補充を、冬にも実施するようにし、学習面で課題を抱えている生徒の支援を拡充できた。 ○職員間に「ICTを有効活用した授業」の意識が広がっており、生徒が主体的に取り組む授業の実践が増加している。 ▲生徒の主体性を向上させ、自ら学ぶ姿勢を構築したいが、家庭での学習習慣をなかなか付けることができない生徒もいた。 	総 合 評 価 A (B) C D
13 来年度に向けての改善方策案 <ul style="list-style-type: none"> 研究授業や公開授業週間を通して、教員の授業改善に努め、指導力の向上を図る。また、課題を通して家庭学習における支援を行い、家庭での生徒の学習習慣の確立に努める。そのうえで、学習面で課題を抱えている生徒に対しては、夏、冬の補充でケアをすることにより、生徒一人ひとりの学力の伸長を図る。 生徒が自ら学び、自ら考える姿勢を構築できるような指導、声掛けを教員がしていけるよう、教員間の連携、コミュニケーションを強化し、教員全体で問題を共有し解決していける雰囲気づくりに努める。そのための研修も教員に対して行う。 		

II 学校関係者評価

実施年月日：令和6年2月5日

<p>【意見・要望・評価等】</p> <ul style="list-style-type: none"> 本校における学習指導は新しい学力観よりは旧来の概念に基づく運営だが、本校の役割としてはこれで良い。新しい学力の概念は変化の激しい時代に自分で考えて問題を解決していく力を身に付けることだが、その力を付けるには基礎学力が必要である。本高の生徒は標準的な基礎学力は身に付けているという保証をつくっていくことは地域にとって大切である。 本校の生徒で習熟度の差が広がっていることについて、その原因は入学者選抜が機能していないのか入学後の指導によるものなのかを考えることは重要である。 学習指導でのICT活用においては、思考力を養うに活用になるよう配慮が必要である。 自主的に学習する姿勢を養う方策を考えてほしい。
--

令和5年度 自己評価・学校関係者評価 報告書

岐阜県立大垣南高等学校 学校番号 22

I 自己評価

1 学校教育目標	建学の精神「堅実真摯」 生徒一人ひとりの知・徳・体の調和のとれた人格形成を目指し、豊かな人間性と健全な心身を育み、自らの可能性を追求し地域社会に貢献できる生徒を育成する。		
2 スクール・ポリシー	『育てたい生徒像』 グラデュエーション・ポリシー (GP)	『生徒をどう育てるか』 カリキュラム・ポリシー (CP)	『どんな生徒を待っているか』 アドミッション・ポリシー (AP)
	<ul style="list-style-type: none"> 確かな学力を身に付け、よりよく課題を解決する思考力・判断力・行動力をもち、自立して主体的に行動することができる生徒 豊かな情操と規範意識をもち、自己効力感が高く、他者を思いやり地域や社会に積極的に貢献しようとする心に富んだ生徒 健康維持や体力づくりに努め、自他の生命を尊重し、たくましく生きる力を身に付けた生徒 	<ul style="list-style-type: none"> 課題発見力・課題解決力を育成するための「主体的・対話的で深い学び」や「探究的な学び」の推進と、ICT等を活用したコミュニケーション能力と発信力の育成 生徒一人ひとりの個性や長所を伸ばすためのカリキュラムの編成と、個に応じた細やかな指導による自己効力感の伸長 勉強と部活を両立させ、心身ともに健康で人を思いやる豊かな人間性の涵養 	<ul style="list-style-type: none"> 大学進学を目指し、多様な学びに主体的に取り組み、自らの可能性に挑戦したいという意欲のある生徒 向上心をもち、部活動や生徒会活動に積極的に参加し、他者と協働してよりよい学校や社会を築いていこうという意欲のある生徒

3 評価する領域・分野	◇生徒指導		
4 現状の分析 (生徒及び保護者等を対象とするアンケートの結果分析等)	<ul style="list-style-type: none"> 高校生としてのマナーや社会規範を身に着けさせる。90.2→90.8→84.7% 学校は個々の相談に丁寧に応じている。85.3→85.4→80.0% いじめや差別に対する厳しい対応。85.0→83.6→68.4% ただし、アンケートの対象者や回収方法の変更により、単純な経年比較はできない。		
5 今年度の具体的かつ明確な重点目標	<ul style="list-style-type: none"> 自転車・歩行者の交通安全や危機管理意識の向上。 社会の一員としてのマナー遵守への意識向上。 教育相談を中心とした、個々の生徒に応じた適切な支援への連携。 		
6 重点目標を達成するための校内における組織体制	<ul style="list-style-type: none"> 職員が一致協力して取り組める体制を確立していく。 教育相談と関係外部機関、生徒指導の連携を図る。 		
7 目標の達成に必要な具体的な取組	8 達成度の判断・判定基準あるいは指標		
(1) 様々な交通安全啓発活動を通して生徒自身の交通マナーに対する意識の向上 (2) 身なり・マナー指導の継続実施 (3) 放送等によるタイムリーな指導の実施 (4) 十分な生徒理解による適切な支援の実施	(1) 交通安全啓発活動が計画どおり実施できた。 (2) 身なり、マナー指導を計画どおり推進できた。 (3) 迅速な対応による、早期対応ができた。 (4) アンケート調査の結果より細かな指導ができた。		
9 取組状況・実践内容等	10 評価視点	11 評価	
<ul style="list-style-type: none"> 安全指導 (月2回の交差点指導、校門指導) (適宜行う交通安全指導) 身なり、マナー指導 (薬物乱用防止講話) (定期的に身なり指導) 生徒理解、人権教育 (全校一斉SNSに関する教育) 	<ul style="list-style-type: none"> 交通事故防止の取り組みができたか。 身だしなみやマナーが向上したか。 生徒理解を深め、人権意識を高めることができたか。 	(A) B C D A (B) C D A (B) C D	
12 成果課題	○教員間で生徒情報の共有を行い素早い対応ができた。 ○全体的に交通安全に関する意識が高まり、交通事故の発生件数は減少した。交通ルール違反者も減少したと思われる。来年度も交通安全防止を呼び掛けていきたい。 ・▲校内でスマホを使用し、指導される生徒が増加した。 ・▲身だしなみは落ち着いてきたが、悩みを抱える生徒が増加した。		総合評価 A (B) C D

13 来年度に向けての改善方策案

- ・スマホの依存使用や登下校中のながらスマホをなくす。
- ・引き続き来年度も校則の見直しを検討していきたい。
- ・教育相談に関わる研修会を継続して実施していきたい。
- ・身なり指導の実施回数を減らす。

II 学校関係者評価

実施年月日：令和6年2月5日

【意見・要望・評価等】

- ・安全に安心して学校生活を送れるよう、きめ細かに日々の指導がなされて成果が認められる。
- ・暑さ寒さ対策としての制服以外の着用を認めている点は良い。
- ・自然にルール等を守ることができる生徒を育成してほしい。
- ・スマホ依存の生徒に対して、学校生活に集中できない状況が心配である。生徒と家族が一緒になって医療と連携して依存症を克服する方法を考えなければならない。
- ・高校生は精神的な病気を発症しやすい年代である。スクールカウンセラーには希望する生徒のカウンセリングだけでなく、教職員も相談して専門的なアドバイスをもらおうとよい。

令和5年度 自己評価・学校関係者評価 報告書

岐阜県立大垣南高等学校

学校番号 22

I 自己評価

1 学校教育目標	建学の精神「堅実真摯」 生徒一人ひとりの知・徳・体の調和のとれた人格形成を目指し、豊かな人間性と健全な心身を育み、自らの可能性を追求し地域社会に貢献できる生徒を育成する。		
2 スクール・ポリシー	『育てたい生徒像』 グラデュエーション・ポリシー (GP) <ul style="list-style-type: none"> ・ 確かな学力を身に付け、よりよく課題を解決する思考力・判断力・行動力を持ち、自立して主体的に行動することができる生徒 ・ 豊かな情操と規範意識を持ち、自己効力感が高く、他者を思いやり地域や社会に積極的に貢献しようとする心に富んだ生徒 ・ 健康維持や体力づくりに努め、自他の生命を尊重し、たくましく生きる力を身に付けた生徒 	『生徒をどう育てるか』 カリキュラム・ポリシー (CP) <ul style="list-style-type: none"> ・ 課題発見力・課題解決力を育成するための「主体的・対話的で深い学び」や「探究的な学び」の推進と、ICT等を活用したコミュニケーション能力と発信力の育成 ・ 生徒一人ひとりの個性や長所を伸ばすためのカリキュラムの編成と、個に応じた細やかな指導による自己効力感の伸長 ・ 勉強と部活を両立させ、心身ともに健康で人を思いやる豊かな人間性の涵養 	『どんな生徒を待っているか』 アドミッション・ポリシー (AP) <ul style="list-style-type: none"> ・ 大学進学を目指し、多様な学びに主体的に取り組み、自らの可能性に挑戦したいという意欲のある生徒 ・ 向上心を持ち、部活動や生徒会活動に積極的に参加し、他者と協働してよりよい学校や社会を築いていこうという意欲のある生徒

3 評価する領域・分野	◇進路指導		
4 現状の分析 (生徒・保護者等を対象とするアンケート結果分析等)	▲アンケートの回答時期が夏であることも影響し、1年次生徒及び保護者の両方で「進路情報の提供」について、低めの評価となった。低学年次は、後期を中心に進路講話や保護者進路研修会を設定しているため、やむを得ない部分はあるが、早期の進路情報の提供に努めていきたい。 ○3年次生においては、「進路情報の提供」と「適切な指導助言」の項目で、生徒、保護者ともに満足度が高かった。また、補習や土曜開放などの「積極的な支援」の項目では、全学年で高い評価を得た。今後も生徒の多様な進路希望に対応できるよう工夫していきたい。		
5 学校の抱える課題	<ul style="list-style-type: none"> ・ 新課程年次生の学力の多層化（低学力層の増加） ・ 明確な進路目標を設定できない生徒の増加 ・ 勉強と部活動、課外活動を両立できない生徒の増加 		
6 今年度の具体的かつ明確な重点目標	<ul style="list-style-type: none"> ・ 3年間を見通した進路指導計画に基づき、各学年の到達目標達成のために、学年会との連携を強め、組織的な進路指導体制を確立する。また、大学入試改革等への対応を意識した計画、体制を研究する。 ・ 受験指導体制をより充実させるために、職員の進路指導研究、入試制度や入試問題研究、小論文指導対策等の自己啓発活動の推進を図る。 ・ 生徒が自己の生き方を長期的な視野で主体的に考えることができるよう、「総合的な探究の時間」等を通してキャリア教育を推進する。 		
7 目標の達成に必要な具体的な取組	8 達成度の判断・判定基準あるいは指標		
(1) 進路指導計画に沿った進路講話や保護者進路研修会等を充実させる。 (2) 各学年や各教科と協力し、学力分析や学力伸長に向けた取り組みを充実させる。	(1) 進路講話後の生徒の様子や保護者進路研修会後のアンケート結果 (2) 外部模試の結果分析と情報共有、進路情報の提供、各学年、各教科の取り組み状況		
9 取組状況・実践内容等	10 評価視点	11 評価	
<ul style="list-style-type: none"> ・ 保護者進路研修会を3年は5月、2年は11月、1年は9月に実施。 ・ 3年生に向けて、河合塾講師による英語特別講座に加えて、志望理由書の書き方講座や代ゼミ講師や本校国語科教員による小論文特別講座を実施し、小論文の指導と対策を充実させた。 ・ 外部模試実施後に結果分析を行い、情報を共有し、各教科・学年で学力伸長に努めた。 	① 保護者に対して時機を見た進路情報の提供ができた（アンケート結果） ② 講座受講後の生徒の反応 ③ 外部模試結果による学力伸長の度合い	A (B) C D (A) B C D A B (C) D	

12 成 果 ・ 課 題	<p>○保護者進路研修会では、各学年に合った進路情報を提供することができた。1・2年次生では、新課程入試に関する最新情報を提供することができた。</p> <p>○外部講師による講演や特別講座は、生徒のやる気を引き出し、その後の取り組みに反映させることができた。また、ふるさと教育探究活動では、地域の様々な方からご指導ご協力をいただき、生徒の主体的な活動を引き出すことができた。</p> <p>▲新課程年次生における学力の多層化と課題の多様化が進むなかで、一律の指導では対応が難しくなっている。進学補習を低学力層対象の「基礎講座」と中学力層対象の「標準講座」の2つを設定するなどしたが、効果は大きくなかった。</p>	<p>総 合 評 価</p> <p>A (B) C D</p>
13	<p>来年度に向けての改善方策案</p> <ul style="list-style-type: none"> 引き続き保護者進路研修会の内容の充実と工夫を図り、保護者の方に早期化・複雑化する大学入試制度への理解を深めていただく。 各大学の総合型選抜・学校推薦型選抜の定員数増加に対応するため、本校教職員への研修会参加や情報提供の充実を図り、足並みを揃えて指導できるよう体制の強化を図る。 A I を利用した個別最適化学習の導入を図る等、各教科や学年と連携して、多層化する生徒への対応をより丁寧に行っていききたい。進学補習や土曜開放への参加などを促し、基本的な学習習慣の形成にも努めていきたい。 	

II 学校関係者評価

実施年月日：令和6年2月5日

<p>【意見・要望・評価等】</p> <ul style="list-style-type: none"> 早い段階から進路情報を提供することは生徒が進路を考える上で大事である。習熟度の低い生徒の心をつかみ学習習慣が身に付く情報が提供できるとよい。 外部の人を招いたりインターンシップへの参加することで生徒は将来の働くイメージを持ちやすくなるので、引き続きそのような企画をしてほしい。 大学等へ皆が行くから自分も行くのではなく、行った先で何をやるかが重要である。進学することが目的ではなく、そこで何を学び、どのように社会に貢献したいかというビジョンが大切であり、やらされている勉強では身に付かない。生徒に意欲を芽生えさせることが大切である。 総合的な探究の時間における活動について、教科書にも記載されておらず答えがない課題に対して、地域の方も含めて共に取り組んでいく時間は大切である。
